

短歌

目を閉ぢて

柴

舟

ものいはず目閉ぢてひとりわが居れば世界しづかに遠ざかりゆく
 まなぶたの限りにあたり折れかへりわが沈思の世ひろごれるかな
 入りまじり亂れあひつつ綾を織る思へる事と見ゆるすがたを
 をりくくに近うなりては遠く消ゆ夢の世界のこまかきりすむ
 夢に入らず現にさめぬこの今の心をなにの心といふや
 へだたりもひろこりもなく人の世のものぞつごへるまなぶたの中
 青きものはた黄なるもの赤きものみだれよりきて夢にいざなふ
 夢にゆく心をくかへるらしまたもこの世の物音をきく
 あかるきにあらず暗きにはたたがふ中を行きかふ知れる人々
 人の世の日のかげさせば一齊に紅う燃えたつ今のわが世や

南下北上

賛助員河崎

つ

しばらくは北海道を忘れよと洗面所にてかほ洗ひをり
 洗面所蛇口ねぢればほどばしる水よ親しき寄宿舎の水
 已が植ゑし楠の木いたく丈のびぬ北海道にて何してありけむ
 古ピアノ廊下の隈にいまもあり下手ながらにもよく弾きしかな
 病室の暗き窓がらす我がありし二年まへにも曇りてありき
 女学校の生徒等とわが毬なけし芝生にきたりひとりまりなく
 お茶の水九段坂下小川町などいふ名もなつかしきかな
 思ひおもひに何かなさむと一月の休みを東京に集りし友等
 何といふ楽しく悲しきあつまりぞ友等老いたり友等おいたり
 東京に来てことごとく涙するあさましき我いとほしき哉
 大なるいつはりごとくをきく如く物のひびきのかなし東京
 誰にも誰にも逢ふこといやになりは鳥歌かきつけて北海道に歸らむ
 鳥のなく如く歌よみ鳥の死ぬごとく死ななむ北海道にて
 お茶の水の橋とやらかし自動車のつきくゆけどかはりもなし